

●最優秀賞

不登校事例における教員の 職能成長

奈良県御所市立葛小学校 福本義久 ふくもと よし ひさ



1. はじめに

1997年8月15日、A男は、わずか10才で不慮の死を遂げた。A男の告別式に、当時、不登校真っ直中にあったB男が、ほぼ1年ぶりの姿を涙にむせぶ級友の前に現したのであった。しかも、真夏にもかかわらず日焼けの跡もないB男の色白の手には、“天国からの地図”が握りしめられていた。

「先生、これ…。A男の棺に入れたって。」

「A男が天国から帰ってくるときに迷わんようにと思って一晩で描いてん。」

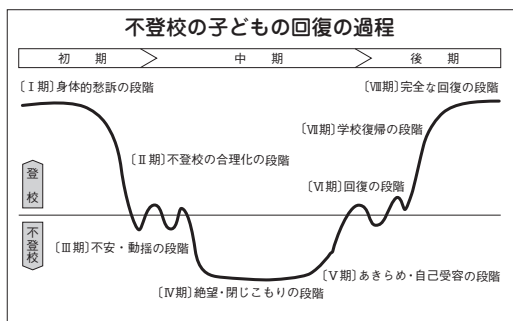
教え子を亡くした失意のどん底にいた私は、このB男の言葉でやっと我に返ることができたのである。同時に、このあまりにも突然の悲しい出来事がきっかけとなって、B男自身の中でも不登校状態から回復に向けて大きく歯車が動き始めたように思う。

あの日から11年が過ぎた本年度、私は、学校現場を離れ、奈良教育大学大学院教育学研究科教職開発専攻（以下“教職大学院”という）で長期研修に身を置く機会に恵まれた。過去20余年の教職経験では、日々の教科指導や生徒指導に取り組むことで精一杯で、なかなか理論的な裏付けをもって実践を振り返ることはできなかった。しかし、本教職大学院では、自らの実践を理論的な枠組みだけではなく、様々な世代の院生による多面的な視点からとらえ直すことが

できる機会でもある。

本事例は、前任校において経験したもので、私の教職経験上決して忘れることのできない、忘れてはならない事例であり、どんなに困難な課題に直面したときでも私を我に返らせてくれる心の拠り所となっている。この事例を本教職大学院での「ケース・スタディ」という講義で事例研究として提供したことを機に、日記風にまとめただけの記録を新しく学んだ知見に沿って再構築することにしたのである。そうすることによって、新たな気づきや取り組みの課題などを明確化することができたように思う。

また、A男の墓参で偶然B男に出会うことができ、本人が当時を回顧して語ってくれたことも今回加筆することができたことは、この事例が今もってA男やB男と私とを強く結びつけてくれている証であり、私の職能成長を測る物差しでもあると考えられる。



●図1／不登校の子どもの回復の過程

ところで、不登校の子どもが回復していく際、〈図1〉のような8つの段階を経ることが多いという。⁽¹⁾

「ケース・スタディ」の講義でこの資料を手にしたとき、とっさにB男の事例が想起され、グラフを目で追いながら一つ一つの段階の説明を読み進めてみて、「腑に落ちる」ということを体感した。私がB男を担当した時は、すでに〔Ⅲ期〕から〔Ⅳ期〕あたりにさしかかっていたため、B男や両親はもちろん私にとっても長いトンネルの中を灯りも持たずにさまよい歩いているような時期が続いたのであったが、それはそれで慌てる必要はなかったのだと気づくことができた。ただ、B男の場合は、A男との悲しい別れによって〔Ⅳ期〕以降を早めに迎えることができたのではないかと思えるようになった。

以下、この8つの段階に沿ってB男との2年間で再構築し、新たな知見や気づき、B男の振り返りとともに考察を加えることにする。

2. 事例の概要（小学5年生当初）

(1) 本人（B男）について

B男は小学校4年生の6月頃から不登校傾向が顕著になり、7月からはほぼ全欠状態。（私は、5・6年生時の担任である。）

道路地図の模写を得意としていて、一日中机に向かって作業していることが多い。ただ、母親が登校刺激を与えると、包丁を持って母親を脅したり、箒で母親をたたくなどのパニック状態に陥る。

(2) 家庭の状況

B男の家庭は宅配業に従事する父親と専業主婦の母親との3人家族である。B男に不登校傾向が現れた頃、父親は脱サラして現在の宅配業に転職した。母親は、B男に独占された状態にあり、掃除や洗濯、食事などの家事には行き届かない。

(3) 家庭での様子（5年生当初の母親のコメント）

父親は仕事のため、ほとんどB男とかかわる時間がなく、四六時中母親と二人っきりの状態

で家に閉じこもっている。B男が常に母親のそばを離れないため、母親は、日々の買い物にもなかなか出かけることができない。

B男は、気分が安定しているときは、地図の模写をして過ごしたり、NHK教育テレビの『おかあさんといっしょ』や幼児向けのアニメ番組に興じていることもある。一方で、機嫌を損ねるとトイレに閉じこもって出てこなくなったり、母親に暴力をふるったりする。また、昼夜逆転した生活をしているため、母親の睡眠時間が極端に少なく、家事に影響が出ている。そのことを父親が厳しく咎めることから、母親自身はB男との狭間でなすすべがない状況にある。

B男は、欲しい物があると、「明日、学校に行くから買って。」と母親にねだって買わせている。

(4) 学校での様子（母親・担任の記録、コメントから）

〈1年生〉欠席状況…3日／39日、

24日／187日〔前校〕

○ いじめられ、近所の子どもたちと一緒に登校することができず、母親が学校まで送っていった。そこで、いじめから逃れるため、3学期途中より本校に転入してきた。母親の送り迎えは2年生になるまで続いた。

〈2年生〉欠席状況…9日／223日

○ 担任が、B男の視力が弱いことに気づく。担任の再三の勧めにより、眼科医にかかったが、矯正しても0.3程度の視力であった。

〈3年生〉欠席状況…10日／220日

○ 同じクラスになったC男と仲良くなり、始終行動を共にするが、けんかの繰り返しであった。しかし、C男以外の友人をつくろうとせず、学校ではもちろんのこと帰宅後もC男と遊んでいた。

〈4年生〉欠席状況…167日／220日

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3	計
欠席日数	3	4	11	15	21	24	23	15	17	17	17	167
授業日数	17	22	23	16	21	24	23	18	18	21	17	220

3. B男が不登校から回復するまでの過程

I期；身体的愁訴の段階	
特徴	子どもが頭痛や腹痛など体の不調を訴えている時期で、親も子どももまだ不登校の始まりと気づいていない時期。
B男の様子	4年生になって頭痛や腹痛、C男とのトラブルでいやなことがあったことを理由とした欠席が目立ち始めた1学期当初に当たる。

II期；不登校の合理化の段階	
特徴	親や医師が、子どもの体の不調は心理的なものからきていると思い、はじめて不登校を疑うようになる。子どもは学校について不満を述べ、学校に行けない責任は学校や友達などにあると言うようになる時期。
B男の様子	4年生の6月になって、「注射がいやだ」「プールが怖い」などの理由で欠席するようになり、担任のD教諭が家庭訪問しても隠れてしまうようになった。 D教諭は、毎日のように家庭訪問を繰り返したが、登校する準備をしても朝になると、母親に物をぶつけたり、包丁で母親を脅したりしてパニックを起こし、一日中家に閉じこもるようになった。 同7月、校長とB男の両親とがB男のことで相談をし、無理に学校に行かそうとせず、長い目でB男の変化を待つようにすることになった。

III期；不安・動揺の段階	
特徴	この時期、子どもの言うことは言い逃れだと親は子どもを責め、登校を求める。それにつれて子どもは情緒的に落ち着きをなくすようになり、家庭内暴力も起き始める。

B男の様子と私の対応	5年生になって私がB男の担任になり、「学校の話はこちらからしない」「B男のことは詮索しない」「学校へ行こうなどと誘導しない」を三原則として週1回（不定期）、放課後に家庭訪問することにした。 4月末の家庭訪問の際、母親が「このごろB男の機嫌が悪いんです。」と言うと、B男がすかさず、「俺の中には悪魔がうようよおんね（いるんだ）。」と答えた。「悪魔がうようよおるって、それは、どういうこと？」と私が尋ねると、B男は母親を指さして、「こいつが学校へ行けって言うからや。」と答えた。「今はお母ちゃんと一緒にいたいから学校には行かれへんのとちがうの？」と私がB男に問いかけると、B男は「うん。」と素直に答えた。さらに、「お母ちゃんが好き」ということも照れくさそうにつぶやいた。私は、そのことの意味を、「お母さん、Bちゃんが腹立つようなことを言ったりしたりすると思いますが、それは悪魔がBちゃんに言わせていることで、Bちゃん本人が言ってると思わないでくださいね。Bちゃん自身は、お母さんのことが好きで好きで、今はそばを離れることができないのだと思いますから。」と母親に説明することで、B男の言いたいであろうことを代弁した。その上で、登校刺激を避け、B男を甘えさせてあげてほしいと話した。
	自分ではお母さんにひどいことを言ったりしたりしていることはよく分かっているのですが、本当に自分の中に悪魔がいて自分が乗っ取られているとしか思えないのです。特に、お母さんが学校のことを言い出すと、その悪魔が次から次へと出てきて自分をコントロールできなくなってしまうんです。暴れているうちに体はへとへとになっても悪魔がおとなしくなるまでは止まらなくなります。

Ⅳ期；絶望・閉じこもりの段階	
特徴	いろいろ試みても事態は解決せず悪化する。親も子も絶望感を覚える。子どもは落ち着かず、生活も乱れ、閉じこもるようになり、昼夜逆転現象も見られるようになる時期。
	5月初旬の朝、学校に突然母親から電話が入り、相談したいことがあるから、今日は必ず家庭訪問してほしいということであった。 放課後に訪れると、母親が待っていましたとばかりに、「このごろB男がおかしいんです。包丁や箸を持って暴れるし、そうかと思えば私と一緒に風呂に入ったり夜は私にしがみついて寝るんです。それに、テレビ見ながらおしっこをもらしたりおしゃぶりを欲しいと言うんです。挙げ句の果てに、ぼくはどうやって生まれてきたん？ ほんまにお母さんの子どもか？ へその緒見せろ！ って言うんです。」と矢継ぎ早に話した。 B男は今、お母さんとのしっかりとした関係をつくろうとしていろいろ揺さぶっているのだと思うから、お母さんは、何を言われてもどっしりと大きく構えて聞いてやるようにしてほしいと話した。ちょうど、私の子どもの発達段階と重なっているように感じたので、我が子のことを例に出しながら子育て談義のようにフランクに話すよう心がけた。
B男の様子と私の対応	ぼくが暴れるたびにお母さんが先生に電話していることは知っていました。正直なところ、先生に来てもらうために暴れていたときもありました。それは、先生がお母さんにぼくのことをいろいろと説明してくれるのを聞いていると、悪魔が一匹ずつ消えていくような気がしたからです。でも、先生がお母さんにぼくの代わりに気持ちを
	話してくれたときはしばらくの間いいのですが、すぐに忘れてしまって「学校に行け」とか「お母さんは死にたい」とか言い出すので同じことの繰り返しでした。今でも覚えているのは、先生がお母さんに今からもう一度ぼくを育て直すと思えばいいという話をしてくれたことです。先生の家で育ててもらえたら良いのにと考えたこともありました。
B男の回顧	B男の母親と子育て談義のような会話としてB男の育て直しに視点を向けていったことは結果的には良かったのかもしれないが、B男自身が肉親よりも私の方に家庭的な情を求めようとしていたことは、支援者としての立場を逸脱していたのかもしれないと感じた。つまり、B男にとって真に求めなければならない母親との密接な関係づくりを間接的に疎外していた可能性があるということに気づいた。B男の代弁をするのではなく、そんなB男の気持ちに母親が自ら気づけるような働きかけをすべきであったのだと思う。
	新たな気づき
Ⅴ期；あきらめ・自己受容の段階	
特徴	絶望の時期を通り過ぎ、親が長い人生だと覚悟を決めると、家庭内の緊張感が次第にとれてくる。好きなことに熱中しながら、過去の自分を振り返り始める時期。
	夏休み直前の半日授業の午後、B男が2日続けて学校に姿を見せた。一度目は保健室まで入るのがやっとという感じであったが、二度目は5年生の教室まで入った。B男が教室に来た証を残すように勧めると、黒板に「2学期から学校に来る。B男」と書いた。ようやく、B男の中で何かが動き始めているのだと感じた瞬間であった。 終業式後、B男に通知表を届けると、「先
B男の様子と私の対応	

B男の様子と私の対応	生、不登校って書いてよ。」と出欠日数の欄を指したが、「別にええわ。」と冗談を言う余裕があった。4月以降恒例にしていたサッカーをしたいとすぐさまサッカーボールを持って外に飛び出していった。 夏休み中は、父親について宅配の手伝いをするのだとボールを蹴りながらうれしそうに話してくれた。助手席に座って地図を見ながらお父さんのナビゲーションをするのが楽しみだと、地図の模写を特技としているB男らしい喜びを見つけたようで、ずいぶんたくましく思えた。
B男の回顧	「通知表に不登校と書いてほしい。」と私に要求した理由を尋ねたところ、B男は遠い昔のことを懐かしく思い出すように答えた。 お母さんもお父さんも先生もだれもぼくのことを不登校って言わなかったでしょ。でも、1年以上も学校へ行っていないのだから、はっきり不登校って言ってもらう方が気が楽なんです。頭が痛くて体がだるくて医者に診てもらって「風邪ですね」って言ってもらって何か落ち着くでしょ。あんな感じなんです。「早く、だれかぼくを不登校児と認めて!」って思っていました。
新たな気づき	B男の言うように、私は決して「不登校」という言葉を使わなかった。いや、使えなかったという方が正しいと思う。もし、その言葉を使うことによって徐々に回復の兆しを見せていたB男が傷つくのではないかと、状況がさらに悪化するのではないとかいう思いがあったからだ。つまり、そうすることによって、B男や母親に対して配慮しているというポーズをとり、そこに自らの逃げ場所を用意していたのかもしれないと気づいた。しかし、それはB男に対して正面から向き合うことではなかったのかもしれない。

Ⅵ：回復の段階	
特徴	一段と落ち着きを見せ始める。荒れていた生活に活気とけじめが出てきて、隠していた制服や教科書等が少しずつ部屋の中に姿を現すようになる時期。
B男の様子と私の対応	同じクラスのA男が、お父さんと共に川で亡くなるという衝撃的な出来事があった。緊急の学級登校日には、B男は出席しなかった。しかし、告別式当日、B男は母親の喪服の裾を強く握りしめ、級友には目もくれずまっすぐに私のそばに寄ってくるなり、「天国からの地図」を自ら広げて私に手渡した。 「ここがB男の家やねん。半径1km以内の地図を縮尺5千分の1で描いてあるから、絶対に迷わへんと思う。」「ついでに、ここがおれの家やから。」 一晩で描き上げたという“天国からの地図”は実に詳細に描かれていて、B男以外の級友の家もきちんと描き込まれていた。級友はもちろん、告別式の参列者がその地図に集まり、その出来栄を褒め称えその場が騒然となると同時に、父子の非業の最後を悼む人々の涙を誘った。私は、B男自身に“天国からの地図”を棺に納めさせるべきかどうか悩んでいたが、B男の母親の眼差しから「先生、お願いします。」という意図を感じ、私の手で納めることにした。3年生の時から同じクラスだったA男の死は、B男にとって言葉では表すことのできない人間の本质のような所に何らかの共鳴するものを与えたのではないかと後から思った。 2学期初日から2日間、真っ黒に日焼けしたB男が登校した。クラスではA男の机に花が飾られている以外はそれまでと変わらないように感じられるぐらい、B男を自然に受け入れていた。ところが、C男との

B男の様子と私の対応	トラブルが原因で再び欠席するようになった。母親から学校に電話があり、明日から学校へ行かせるので時間割を教えてほしいとのことであった。いつになく、母親に元気と自信とが感じられる口調であった。 連絡を届けると、母親が「今、あんまりえらそうに口答えるもので、たたいて怒りましてん。」と頼もしい表情で話した。そして、「先生に言うことあるやろ。」とB男を促すと、「明日から学校に行きます。」とB男は許しを請うような表情でつぶやいた。母親が母親になった瞬間を見た気がして、憔悴しきっていた私にまで母親が励ましてくれているように思えた。	がどれだけ身近であるのかということを考えさせられた。逆に言えば、私のような観念的な人間にとっては、“死”という人間の尊厳に対する感覚がとても乏しいのではないかとさえ思えた。 さらに、いくら特技にしているとはいえ、たった一晚であれだけ詳細な地図をフリーハンドで仕上げるだけのモチベーションと緻密さや集中力には、今更ながら感服してしまう。せめて、写真にでも残してあればと悔やまれるところであるが、それだけの潜在能力や可能性を私はどれだけ引き出したり伸ばしたりする手伝いができたのだろうかと考え込んでしまう。そうすることが教員の本分であるはずなのだ。
B男の回顧	私は、B男が“天国からの地図”を描いたわけがずっと知りたかったことを打ち明けたところ、このように教えてくれた。 おじいちゃんが亡くなったとき、お盆になったらおじいちゃんがあの世から還ってくるって聞いたので、A男もちょうどお盆に亡くなったし、まだ子どもで還ってくるのも大変だろうと思ったんです。ちょうど、夏休みにお父さんの仕事を手伝って毎日ナビゲーションしましたから、思いついたんだと思います。	VII；学校復帰の段階 学期初めや学校行事などをきっかけに学校に復帰するようになる。登校したり休んだりの散発的な登校から次第に出席日数が増えていく時期。
新たな気づき	不登校になる子どもは、人一倍感受性が豊かであるがゆえに立ち止まり、人生の階段を二段飛ばしするというような登り方ができないのだと学んだ。早期教育がもてはやされる昨今、子どもはまるで促成栽培でもするかのように早く大人になることを余儀なくされている。そんな社会では、人一倍感受性の豊かな子どもは立ち止まらざるを得ない厳しい状況にあると言える。不登校児童生徒数が増加傾向にあることも納得できるように思うが、B男のような感受性豊かな子どもにとって“死”ということ	B男の様子と私の対応 登校してはトラブルを起こしていたC男との関係がスムーズにいくことを母親は願っていた。そこで、C男宅を訪ね、C男とその母親とに事情を話し、一緒に登校できるよう朝の待ち合わせ場所と時刻を決めてB男に知らせた。 それでも、毎日のようにB男とC男とのトラブルは続いた。2人が互いの愚痴を交互に私に告げに来る。互いの言い分をじっくり聞いてやると、また仲直りをしてあっけらかんとして遊んでいた。以前は、欠席する理由になっていたC男との関係が、今ではB男の登校する理由に昇華しているように感じた。 4年生時にB男と同じクラスだった子どもたちは、B男に手紙を書き、交代でB男

に届けに行くことを日課のようにしていたらしいが、どんなに努力してもB男の状況が変わらないため、子どもたちは無力感のようなものを感じているようであった。そこで、私はそのような体制はとらず、B男との関係は担任である私が引き受けることにし、差し障りのない範囲でB男の様子を子どもたちに伝えるようにしていた。特に、B男作の地図を教室に掲示するコーナーを設けることで、子どもたちのB男に対するつながりは保たれていると考えていた。

しかし、B男の発達段階からはC男との関係がすべてだと考えてしまうことは仕方ないとしても、少しずつ人間関係を広げていけるような手立てを工夫しておくべきでもあったと思う。

男の母親が出席した。顔見知りの方から声をかけられると、うれしそうに挨拶を返していた。B男もまた、そんな母親を気にしながら、休業日ではない土曜日にもかかわらず半日ががんばった。

4. おわりに

今回、10年ぶりにこの事例に関する記録を何度も読み返してみたところ、冒頭に示した不登校の子どもの回復の過程に沿って8つの段階を経て回復していくことがよく分かった。しかし、本文で整理しただけの情報では、B男や母親の微妙な心の動きや変化までを汲み取ることはできず、一見、グラフと同様にスムーズな経緯で回復に至ったような印象を抱くかもしれない。しかし、実際には、それぞれの段階においてグラフは上下に振れたり、前に進んだり後退したりしながら次の段階へと進んでいったことがより鮮明にとらえることができた。

また、偶然にもB男本人から、当時の苦しい心境や母親や私に抱いていた本心を聞かせてもらうことができたので、当事者しか知り得ない事実を下敷きにした上で、理論的な枠組みから事例をとらえ直すことが可能になった。これまで様々な実践報告を見聞きしてきたが、不登校状態にあった本人の回顧を横糸に、当時の事実を縦糸にして編み上げた実践報告は初めてではないかと思う。もちろん、心理学的な分析や理論付けが必要なものかもしれないし、一つ一つの事実への私の対応の是非を省察すべき余地があるのかもしれない。

当時私は、B男が不登校から回復することができたのは、数々の不思議な“ご縁”が重なったことが大きなきっかけになったと考えていた。とりわけA男の死は、いくら箒でたたいたり、包丁を突きつけたりしても、B男は愛おしいわが子に違いないと母親に再確認させたし、B男には、「ぼくは、ここにいていいんだ。」という存在根拠のような実感をもたらしただけで違いないと感傷的な解

Ⅷ：完全な回復の段階

特徴

完全に不登校の状態から脱して健全な生活をするようになる。親も子どもも学校へ行けなくなるかもしれないという不安から解放される時期。

B男の様子と私の対応

運動会、修学旅行にも参加し、2学期後半になると、欠席するインターバルが長くなり、欠席するとしても母親から必ず電話が入った。「ちょっとがんばりすぎて疲れたと思います。また、明日から行かせますから。」と余裕の出た母親の言葉に安堵した。

しかし、B男は休業日でない土曜日だけは必ず休んだ。それも、前日に「先生、明日は土曜日なので休みます。月曜日の連絡を教えてください。」と言って。折しも、学校5日制が導入される前年のことであった。

そんな中で実施した土曜参観当日。それまで一度も見たことのない、化粧し、パーマをかけ、着飾った姿で恥ずかしそうにB

釈をしていた。

しかし、B男や母親にとって一番大切だったことは、人間と人間のかかわり合いの中で、関係性を回復することであったはずである。つまり、この親子が乳児期から幼児期にかけてできなかった母子関係を回復するには、もう一度関わり直すことでしか回復できなかったのであろう。このように考えると、私自身の子どもが幼児期であったことは、母親がB男にどのような関わりをもてばいいのかを考えるきっかけになったと思うし、B男にとっても、5年生にもなつて母親に甘えることを正当化できたわけである。これらの“ご縁”が味方し、B男はもちろんのこと、母親にも社会性が回復されていったと考えるべきだと気づいた。

当時の私は、理論的な背景も根拠もなくB男や母親と向き合っていたし、日々の対応に追われる中では、理論的な支えを求める余裕はなかったことも事実である。本教職大学院では、「理論と実践の往還」を目指した学びの構築を重視している。つまり、理論の実践化と実践への理論付けとが一体化することを目指している。学校現場での実践を“蟻の目”で事象をとらえようとすることだとすると、理論を学ぶことは“鷹の目”で事象を俯瞰することであると言える。B男が描いた“天国からの地図”は、正に“鷹の目”で物事をとらえようとすることへの伏線でもあったのではないだろうか。今回、“蟻の目”では気づくことのできなかった事象の本質を“鷹の目”から見つけることができた。このような職能成長が、学校現場で求められる「理論と実践の往還」であり、教員の資質でもある。今後の教育活動の拠り所として本事例と共に大事にし続けていく決意を新たにした。

<参考文献>

- (1)池島徳大(2001)「不登校問題の理解と支援」『奈良県立教育研究所研究紀要』奈良教育研究所
- 佐藤修策、井上肇監修(1995)『登校拒否は

なおる』山陽新聞社、p.61-65